

紙の「本」とそうでは無い「本」

青森県立保健大学 学長

吉池 信男

ヨシイケ

ノブオ

図書館にたくさん置かれている「本」は、「書物」「書籍」などとも呼ばれますが、説明的に表現すると、「何かが描かれている紙の束を綴ったもの」と言えるでしょう。私たち大学教員にとって、自分の研究を論文として発表することが大事な務めですが、論文のことを称して“paper”と呼ぶこともあります（例：「あの教授は何百ものペーパーを出している」）。そう、従来の感覚としては、古代のパピルスの時代から「紙」が大事にされてきました。

インターネットさらには SNS 世代の学生諸君においては、「紙離れ」あるいは「ネット依存」が普通になっていると思いますが、研究の世界でも印刷された紙の論文をコピー機で複写して・・・等といった作業は「もう勘弁して」という状況です。ポイントは、たくさんの本や論文などから自分が求めたいものを見つけ出すためには、電子情報の検索が不可欠だということです。実際にほとんどの研究論文の要約やキーワード等はデータベース化され、インターネットで瞬時に、そしてそれなりの厳密さで検索できるようになっています（30 年程前には、ものすごく厚くて細かい字がびっしりと書かれている索引帳みたいなもので必要な論文を探していました）。そして多くの論文は、インターネットからすべての内容を入手することができます（かなりの金額をとられる場合も少なく無いのですが）。

一方、いわゆる「書籍」についても、専門的な教科書を含めて「電子化」がかなり進んできています。なんと言っても厚さ 5mm 程度のタブレット端末にもものすごい分量の本が収まるのは便利ですし、Amazon 等で英語の電子書籍を購入すると、単語を自動で調べてくれたり、読み上げてくれたりなど、うまく使うと英語の勉強にも使えます。さらに私自身は、これを「読書」と言って良いかどうかは別として、スポーツジムで、話題の本の朗読を聴きながら筋トレをして、脳みそと筋肉を同時に鍛えること



を習慣としています。さりとて、半分くらいは「紙の本」を購入し、手元に置いて「読書」しています。

これからの時代、さらに IT 化が急速に進み、「本」の未来がどのようなようになるか予測は難しいのですが、人生 100 年時代において「本」と仲良く暮らすことは、豊かな人生のためにも変わらず大切なことだと思っています。

